

新規採用教職員辞令交付式

大石健一教育長講話

「新任教職員に期待するもの」

◇日 時：令和7年4月1日（火）

◇場 所：県立郡山高等学校



辞令交付



教育長講話

郡山城跡の満開の桜に見守られ、ここに新規採用の皆さんの門出に立ち会えることを本当に嬉しく思っております。

辞令交付式の中で、代表者から誓いの言葉をいただきましたが、本当に素敵な誓いの言葉をありがとうございました。「愛する」ということをとても大切にしてこられたということですが、これからずっと子どもたちを愛し続けてほしいと思いますし、また同期採用の仲間も大事にしてほしいと思うところです。

こうして教員となられる方、実習助手となられる方、また学校事務職員となられる方、いずれも教育に携わろうという思いで採用試験を受けていただき、そして見事に合格し夢を叶えられました。皆さんにお祝いを申し上げるとともに、我々の仲間を迎え入れられることを嬉しく思っております。

今日は、「新任教職員に期待するもの」という題で、「教育に関すること」「学校に関すること」「教員に関すること」について少しお時間をいただければと思っています。

まず、「教育とは何か」という話です。山極壽一先生という、以前、京都大学の総長をされていた方がいらっしゃいます。山極先生は、ゴリラの研究で有名な学者でいらっしゃいます。山極先生は、ゴリラなどの類人猿の研究を通して「人間」を見ておられる。対象物ばかり見ていると見えないものが、他と比較しながら眺めると分かることもありますから、そんな視点で人間を見ておられる先生の著作を私は好んで読むのですが、先生は、進化の過程から見ても、教育を意図して行うようになった動物は人間以外に存在しない、つまり、教育は人間の本性なのだとおっしゃっています。そして、人間はなぜか相手が知らないことや分からないことがあると教えてあげたくなる、困っているなど感じたら手を差し伸べたくなる、という気持ちを備えているようで、教育というのはそんな人間の本性と結びついているのではないかなという言い方もされています。

この教育というのを意図的に、あるいは計画的に行うのが学校です。では、ここからは学校に関することについて話をしましょう。そもそも、学校とは何でしょうか。

私は、学校がごく当たり前にあるものだと思っていたのですが、「学校って何だろう」と考えさせられたのが、ちょうどコロナ禍のときでした。学校が完全に機能を失ってしまったとき、学校とは何かを冷静に考えてみると、子どもたちを家庭から離し、一定の集団で行う教育システムの一つだと気付きました。しかし、コロナ禍では全国一斉に臨時休業となり、子どもたちを集団で学ばせるという前提が失

われ、先生方は非常に苦勞されました。皆さんの中にも、当時講師としてその場に立ち会った人もいらっしゃると思います。1人1台端末や、いいネットならアカウントの配布など、オンライン環境が整っていましたが、それでも何か足りないと感じました。その足りないところに学校教育の大事な要素があるのではないかと考えました。皆さんは、そこに欠けているものが何かということをこれからよく考えながら、学校教育の現場に入ってほしいと思います。

授業一つとってみても、子どもたちは単に一方的に先生から知識を受け取っているわけではありません。友達の意見を聞き、自分の考えと他人の考えの違いを知ったり、そこからまた考えを広げたり深めたりしています。あるいはそういう様子を先生方に見守っていただき励まされながら、学校教育というのは進んでいくわけですから、オンラインではやはりそこはなかなか難しかったと思います。

学校に対する世間の風当たりが強い場合もあります。学校に対して様々なことを言う人もいますが、私はこの学校という教育システムは、本当にすばらしいものだと思っています。日本の学校というのは、ただ知識を伝達するだけではありません。学習指導要領の中には「特別活動」について記されており、小学校から高校まで実施されています。これは他の国にはありません。「特別活動」の目標を読みますと、「集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成する」ことなどが書いてあります。つまり、生活面を含めて、人の中で人と共に成長していく、これを大事にしているのが日本の教育なのです。

日本の社会がどのように外国人から評価されているのかというと、例えば新幹線等が時間に狂いなく絶え間なく運行され、しかも事故がない。あるいは東京などの大都市を歩いていても隅々まできれいに清掃が行き届いている。落とし物をしたとしても多くの場合、それが戻ってくる。避難所で支援物資の配給を受けるときにも整然と並び、人々がものを奪い合うこともなくきちんと待っている。サッカーの試合では、観戦者が観客席のごみを拾ってきれいにして帰る。もちろん日本人全員がそのような行動をしているわけではありませんが、外国の人々はそのようなところに着目し、評価をしています。このいわば規律と秩序、集団生活における協調が一体どこから来るのかを探るために、映画監督の山崎エマさんはドキュメンタリー映画を撮影されました。それは、『小学校 ～それは小さな社会～』という映画です。山崎さんは、「6歳ぐらいの子どもは世界のどこでも同じようだけれども、12歳の日本人は欧米の子どもとは違う。それは学校でさまざまな役割を与えられ、こつこつと大人になる訓練をしているからである。教育で人はつくられ、日本の公教育は社会集団との協調性を育てる役割を担っている。」とおっしゃっています。自分たちで自分たちのことをやる、そして誰かのために何かをする。子どもながらに責任を与えられ、係活動や委員会活動などを行う。自分たちで考え行動していく中で一生懸命取り組む様子は外国の人々からすると不思議な光景なのかもしれませんが、子どもたちは誇らしげですらあります。

欧米で特に大切にされているのは個人です。しかし日本では、集団の中で自分の役割や責任、居場所を見つけていくことが求められます。このように比べてみると、日本は欧米と随分違うことがわかります。ただ、映画の中でも触れられていますが、日本が行っている教育はいいところばかりということではなく、気を付けるべきこともあります。確かに日本の協調性の高さというものは誇るべきものではありますが、一方で同調圧力が強く、そこになじめない人間に対しては非常に苦しい社会であるという側面もあるわけです。最近ではいじめとか不登校という問題も多くあります。もちろん欧米だからといっていじめがないということではありませんが、日本の社会に対する息苦しさみたいなものを感じるような子どもが出てこないとも限らないということを知っておく必要があります。時代の変化も捉えながら、学校というシステムをよりよいものにしていく必要があるのではないかと考えています。

今や断片的な知識は、インターネット上にいくらかでも落ちています。何か知ろうと思ったらインターネットを使って調べれば、答えがすぐに出てきます。「なるほど」とすぐにわかるようなことがたくさんあふれている、そんな時代に学校教育はどうあるべきなのか。発達段階にもよりますが、学びの本質は自学自習だと思います。ただ、それだけで完成するものではないとも思っています。おもしろい授業を受けて、その授業をきっかけとしていろいろなことがもっと知りたくなる。自分が興味のあることだ

けを調べるのではなく、多くの刺激を受けて、そこからもっといろいろなことを知りたくなってくる。そしてそれを一人よがりのものにしないために対話をする。友達同士で意見を聞き合うような、そういう仲間もやはり必要になってくる。そういう学びの場こそ、学校が果たさなければならない役割なのではないのでしょうか。一人ではできないこと、自宅ではできないことを提供できる。それも豊かに提供できる場でなければいけないと思います。当然のことながら授業では、子どもに「これなら自分で勉強した方がましだ」と思われるような授業をしていては話にならないわけですので、ぜひそういうことも意識して学校現場に行っていただきたいと思っています。

学校事務の方には申し訳ないのですが、次に教員の話をしてしましましょう。教員の仕事はブラックであるとしてよく耳にするとお思います。世間では、そのように言われていますが、教員の仕事は素晴らしい仕事であると私は確信しています。教員をやってきてよかったと今も思います。昨日も退職される先生方への辞令交付をさせていただきましたが、皆さん「この仕事をやってよかった」とおっしゃっていました。60歳になっても70歳になっても先生と呼んでくれる教え子たちがいる。そんな仕事はなかなかないわけですので、「教師の仕事を選んでよかった」と御退職された先生方はおっしゃっていました。

教員の素晴らしいところは、自分たちの頑張りが必ず報われるところにあると思います。仕事が大変なときもありますが、それは必ず報われる仕事だと思っています。ただ私たちの頑張りが報われる時期がいつかというのは分かりません。必ず授業の終わりに報われるということではありません。それが卒業して何年後かになるということもあります。けれども、いつか必ず報われる。子どもたちが立派に卒業していく姿を見て、また子どもたちから「ありがとう」と言われるだけで教員をやっているよかったと思える。それを頻繁に感じることができる仕事は、他にないのではないかと思います。

私は高校の教員をしていました。初任のときには、夜間定時制課程の高校に勤務をいたしました。もう40年近く前のことですから、不登校よりはエネルギーが有り余る方の問題行動の多い子どもが多かった時代でした。定時制高校というのは勤労青少年の後期中等教育を保障するためにあるのですが、定時制高校に通う生徒の中には、本当に一生懸命勉強して働いている者がいる一方で、昼間の学校に通っていたけれども、そこで問題を起こして辞めてきたという者もいます。周りの人に高校ぐらい出ておく必要があると言われ、もう一回高校へ入ったけれどまた辞めて、といったことを何度も繰り返しているような生徒もたくさんおりました。私は国語の教員だったので、文集をまとめる仕事をしていました。毎年文集を作成しているのですが、働いて頑張っている生徒、様々な生活事情を抱えている生徒が書く文集なので本当に素敵な文集です。私は文集のまとめ作業である校正係を、特にやんちゃな生徒を選んでさせることにしました。その生徒たちは、国語の成績がよくて集まっているわけではありませんが、本当に一生懸命にしてくれました。きっとその生徒たちは、任された校正係の仕事をきちんとしなければならなかったのだと思います。人間というのは任されると、それに応えようとする、期待されると何とかしようとする。できればよい自分になりたいという思いがどこかにあるのではないかと思います。そして、教員は生徒たちのその思いを信じるべきなのだと思います。

先ほど、誓いの言葉で「愛する」という言い方をしてくれましたが、私の思いと同じことをおっしゃっているなど思いながら聞いていたところです。様々な問題行動をしていた生徒が、私が転勤するとき「ありがとう」と言って、餞別として洋酒をくれました。そのプレゼントは今でも大切に家に置いてあります。これは最後まで子どもたちを信じ、無事に仕事を終えられたら飲もうと思って置いてあります。いつの日かはまだわかりませんが、それを楽しみにしています。

教員という仕事は、「ありがとう」という気持ちを周りから伝えてもらえる、そういう仕事だと思いますし、その気持ちに報いたいとも思える仕事です。皆さんも、これから始まる教員生活の中でどうか、子どもを愛する、あるいは信じるということをやぜひ貫いてほしいと思います。もちろん子どもが言うことを全て鵜呑みにするという意味ではありません。当然、子どもの心を全て理解することはできない。だからこそ分からないままではなく、分かろうとすることが大事だと思います。そして、ベースとして「この子はいいい子なのだ」という気持ちで子どもたちを見ていくことが大切です。子どもたちを信じて

いても裏切られることはたくさんあるでしょう。ただ私の経験からいくと、心底悪い人間というのはないように思います。みんなどこかいいところがあって、そこをどうにかしてあげられるのが教員なのではないかと思っています。

いよいよ教職員生活がスタートするわけですが、皆さんは自信がありますか。教職員としてやっていくぞという意気込みは別として、自信があるかどうかでいうと、私は自信がなくてもいいのではないかと思います。人間は不安というものをもっておくべきなのだろうと思います。自信のなさが謙虚さにつながることもあれば、向上心につながることもあります。そういう人こそきっといい教職員になってくれると思います。自信のなさが、後の教職員生活に必ずつながっていると私は思っています。

城山三郎という作家は、「初心が魅力をつくる」という言い方をされています。自分に安住せずに、人からいろいろなものを受け取って吸収し続けようとする、そういう態度、そういう姿勢が大切だということだと思います。これは教員も同じで、これから何年も教員をやっていただくわけですが、自分が何回か担任をすると、慣れてきて見通しがもてるようになります。しかし、子どもにとっては初めてのことです。これから皆さんの授業は上手になっていくと思います。何回も授業を経験する中で上達してきたとしても、手慣れた教材であったとしても、子どもがそれを受けるのは初めてなのです。ですから、そういう初めての時間を過ごす子どもたちに対して、最後までどのような姿勢で教員生活を送るのかというところが、教員のプロになれるかなれないかの分かれ目のように思います。授業がうまいだけではだめなのです。我々教員から見て上手な授業とすることがあったとしても、受け取る側の子どもにどのような姿勢や心構えて接しているのかが大切です。ぜひ皆さんにはプロフェッショナルな教員でいてほしいと願っています。

これから先の教職員人生において、うまくいかないことは多々あると思います。しかし、それで傷ついたり悩んだりする必要はありません。一生懸命やっていればいいのです。一生懸命やっていたら、その思いは必ず子どもに通じます。そして、次に自分にできることが何かと常に考え続けることが大切なのです。

ニュースを見ていると、教員の不祥事に関するものが出てきます。教員の不祥事は、絶対にあってはならないことです。なぜあってはならないのか。それは、自分が人生を棒に振るなどの「自分が」という話ではなく、子どもたちが傷ついてしまうからです。不祥事を起こした先生に教えられた子どもが、「この先生は私に勉強を教えてくれた人だ」となると、自分の人生の一部分が否定されたような非常に悲しい思いをします。ですから在職中だけに限らず、退職した後も含め、子どもを悲しませるようなことはぜひ避けていただきたいと思います。自分自身の弱さで不祥事を起こしてしまうかもしれないと思う人は、教員にならない方がいい。それは自分のためではなく、子どものために教員にならない方がいいのです。ぜひとも皆さんには身を慎んでいただきたい。身を慎むというのも教職員が教職員としての人間性を磨いていく部分なのです。そうでなければ、子どもに教育はできません。

さて、辞令書が後ほど皆さんに交付されます。辞令書の一番上には、「あなたを採用する」ということを明記しています。これは奈良県教育委員会が皆さんを教職員として採用し、そして奈良県の子どものための教育をあなたに託すということを意味しています。県立学校に着任される皆さんは、奈良県に採用された奈良県の職員ということになります。市町村立学校に着任される皆さんは、その市町村で採用された市町村の職員であると認識をしていただきたいと思います。ただ、市町村で採用された皆さんも、県費負担教職員という言い方をしますけれど、県費、つまり奈良県の費用で給料を負担しているという意味です。県費負担教職員であって、その服務監督に関しては市町村の教育委員会がされるということです。そのあたりをお知りおきください。その市町村の先生方の任命権というのを奈良県が持っている。任命権者という言い方をしますが、奈良県教育委員会がもっています。任命権といいますと、今日は採用ということですが、いわゆる身分に関する様々なこと、これを処分という言い方をします。処分といいますと何か悪いことをしたような印象をもたれるみたいですが、身分上のことすべてですので、採用もまた処分ということになりまして、奈良県教育委員会がそういう一切のことの権限

をもっているということで、辞令書には奈良県教育委員会という文字が入っているということです。

これから皆さんは、公務員として公正かつ誠実に職務を遂行していただくことが必要となりますけれど、子どもたちに信頼される存在になるために、常に公務に使命をもち続けていただきながら、子どもたちの憧れの大人のモデルになっていただきたいと思います。そして、皆さんが高い倫理感と誇りを胸に、本県教育に尽力をいただけることを強く期待しております。職場の先生方とぜひよい関係を結んでいただき、何かあれば必ず周りの先生に相談する。何かあれば、上司や周囲の先生に助けを求めてください。必ず助けてくれるはずです。学校というところは子どもがいるところですので、本当に様々なことが起こります。強い気持ちをしっかりともち続けてください。そして健康に留意をしていただき、ぜひ素敵な教職員を目指して一步一步進んでいってください。応援しております。